

京都大学総長 山極 壽一 殿
副学長 川添 信介 殿

京都大学による吉田寮への対応を憂慮し、学生との話し合いを求める声明

2019年6月20日 21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会理事一同

私たちは、60年以上前から近年までの様々な時期に吉田寮に居住した元寮生でつくる「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」の理事一同です。吉田寮現棟は、築106年の木造現存最古の学生寮であり、旧制三高の建物の一部も引き継ぐ建造物として、貴重な文化的価値があります。さらに、長年にわたって培われてきた、学生の自主自立による寮運営には教育的な意義があると考え、今後もその意義を引き継いで発展することを願い、活動を進めています。

4月26日に、京都大学が吉田寮現棟と食堂に関して、学生20人に対する明け渡しの訴訟を提起したことについて深く憂慮し、これ以上の強硬手段に訴えないことを求めるとともに、学生たちとの話し合いによる解決を、あらためて求めます。

当会はこの間、山極 壽一総長と川添 信介理事に宛てて、2018年6月22日に吉田寮の保全と活用を求める要請書を、さらに要請書への回答がないことに対する質問状を同年7月27日に提出しましたが、前向きな対応をしていただけませんでした。このため、吉田寮の保全活用と学生との話し合いによる解決を求める卒寮生と市民の共同声明を呼び掛け、同年12月19日までに計827人の賛同を得て提出しました。吉田寮の保全活用を願い、学生との話し合いを願う声は大きなものとなっています。

そんな声を無視するかのごとく、吉田寮現棟や食堂の将来像について明らかにしないまま、学生を排除し、一方的に事を進める姿勢からは、吉田寮の今日的な意義への認識が不足していると受け止めざるを得ません。今回の学生に対する提訴は、教育機関としてあってはならないことであり、自由闊達な対話を研究と教育の根幹として掲げてきた京都大学の精神をも踏みにじるものです。

さらにいえば、現棟の老朽化による危険を主張されていますが、人が立ち入ることができなくなった建物は、不慮の火災による焼失の可能性が高まることを指摘させていただきます。かけがえのない建物を、これ以上の危険にさらすことは避けて頂きたい。

吉田寮は、学生のまち、大学のまち京都にとって、かけがえのない財産です。司法の手続きではなく、寮生との話し合いを通じて、歴史的建造物の現代的な保存・活用として、学生の福利厚生施設として、学生の自主自立の場として、どのように吉田寮を存続していくのかを検討していただくことを願います。そして学内外に向けて、吉田寮をどのように将来に引き継いでいくのか、京都大学として表明をしていただくことを期待します。

「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」理事一同（卒寮年・学部） 奈倉道隆（1960年・医）、中尾芳治（1958年・文）、広原盛明（1960年・工）、上田実（1988年・農）、亀岡哲也（1989年・文）、富岡勝（1989年・教育）、盛田良治（1991年・文）、稲庭篤（1991年・理）
事務局 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室 富岡勝